第3話　いまなぜ有馬喜惣太なのか

――萩藩地理図師の執念――

川　村　博　忠

文明史研究室

有馬喜惣太は江戸時代中頃に防長の地図づくりに貢献した人物です。萩で絵師になる修業をしていた彼は元文2年（1737）29歳のとき藩の絵図方に雇われて、萩藩の村絵図作成事業に従事しています。彼は約20年間防長の町や村々、山野を巡り、もっぱら村絵図づくりに心血を注いで、次第に地図作成の技量を伸ばしたようです。

萩藩の村絵図事業が終了したとき、絵図方では彼を欠いては仕事に支障がでるほど必要な人材になっていました。そのため絵図巧者（達人）として引き続き絵図方に雇用され、それから8年後の宝暦12年（1762）彼が55歳のとき長年の仕事ぶりが認められて、15石で藩士に登用され「地理図師」の職名をもらい、以降これは有馬家の家業となります。

彼が晩年に作製した防長両国の立体地図「防長土図」（現在山口県立博物館蔵）は全国的にも例のない逸品で、平成4年（1992）に国の重要文化財に指定されました。台板の上に粘土を地形に応じて固め、小さくちぎった和紙をにかわと混ぜてたたいて貼り重ね、乾いてから粘土を抜き取った張子の仕立てです。17個のブロックに区切っていて、組み立てた全体の大きさは横幅（東西）が6メートルにも達する巨大なもので、100個を越す島々が付属しています。土図の表面はきれいに彩色されていて、国・郡・宰判・村の境界線が明示され、道筋と一里塚はもちろん、勘場や番所、寺社などが三角や四角の記号で示され、地名は村名ばかりでなく小村名までも記載されています。

このような巨大な立体地図をどのような目的で作製したのか彼はいっさい書き残していません。推察するに、地理図師の家業を引き継ぐ子孫のためを思っての執念の作品ではなかろうかと思う次第です。